

歴史の証言聞きたかった

伊藤律氏の
帰国で関係者

苦痛あろうが、真実語れ

潜行から二十九年ぶりに姿を現した伊藤律氏。しかし、その口からは期待された、昭和史の裏面、はついに語られることなく、三日朝の北京空港での会見もわずか五分間で打ち切られた。弱々しそうな様子、果たして真相はこのまま伊藤氏の胸のうちに閉ざされたままになるのだろうか。会見を注目した関係者ら三人に話を聞いた。

中嶋嶺雄東京外語大教授(国際関係論) 伊藤氏をめぐる環境は、社会的反響が大きくなるに従いガードが固くなっていったようだ。伊藤氏の口が固いのは単なる病気のせいではなく、こうした環境が作り出した結果だし、帰国後も当然にもしゃべらないと思う。

伊藤氏のスパイ容疑、査問は当時の日本共産党内部だけの問題でなく、日中共産党の関係などを考へると現代史にも大きな意味を持っている。ソルゲ事件に關しても同様だ。そういう意味ですべてを話してほしい。

伊藤氏は当初、日本に帰ってスパイ容疑のぬれぎぬを晴らしたいと考えていたのではないか。それが現実と違ってきたわけで、帰国は彼にとつて不幸なものになった。なぜこの時期に帰国が実現したのか、いろいろ憶測されているが、日中、日ソの共産党間の新しい動きとは関係したものではないと私は思う。中国は、帰国を中国紅十字会に託すなどしており、人道上の立場から送り帰したということではないか。

今がチャンスなのに

評論家尾崎秀樹氏(戦前の「ソルゲ事件」に連座して処刑された尾崎秀実の実弟) にもコメント

しなかったようだが、明らかにする可能性を今後に残しているということであれば、それはそれでよい。療養が必要なら、療養しながらゆっくり明らかにしてほしい。語るには苦痛も伴おうが、今が一番いいチャンスなのに。時間がたつと逆に語りにくくなるのではないか。(きょうの段階では)せめて「いずれ明らかにしたい」とのコメントがほしかった。このまま将来も語らないとなると、日本共産党の伊藤氏に關する声明、除名理由をすべて肯定することになるが、それでいいと考へているのだろうか。私としては、やはりソルゲ事件発覚の端緒について聞きたかった。

家族思つての沈黙?

翻訳家山崎早市氏(旧制一高当時、伊藤氏の二年先輩で、潜行中の同氏と接触) 二十九年間の迫害と孤独によくぞ耐え抜いたといいたい。革命家の意地と信念があればこそできた。私は伊藤氏がスパイだったとは思わない。本当のスパイだったら耐えられなかっただろう。家族の協力で健康を取り戻してほしい。伊藤氏がスパイ問題や密出国の経緯、中国での生活などをしゃべらなかつたのは奥さんや淳ちゃん(淳ちゃん)の立場を考え、また自分で日本の情勢をみたうえで判断したかったのだろう。彼はそういう慎重さを持っている男だ。